

## 手話とはどのような言語か

大平芳則<sup>1</sup>, 青木さつき<sup>2</sup>, 入山満恵子<sup>1</sup>, 栗崎由貴子<sup>1</sup>

1明倫短期大学 歯科衛生士学科専攻科保健言語聴覚学専攻

2明倫短期大学附属歯科診療所 ことばクリニック

## What kind of language is a sign language?

Yoshinori Ohdaira<sup>1</sup>, Satsuki Aoki<sup>2</sup>, Maiko Iriyama<sup>1</sup>, Yukiko Kurisaki<sup>1</sup>

1Department of Communication Science, Meirin College

2Division of Speech Therapy, Meirin College Dental Clinic

キーワード：手話, 日本手話, 日本語対应手話, ろう

Keywords : Sign Language, Japanese Sign Language, Manually Coded Japanese, Deaf

## 1. はじめに

手話とは何か。簡単に言えば、ろう者のための言語である。手話について正しく認識している人は少なく、誤解はさまざまある<sup>1) 2) 3)</sup>。手話は世界共通である、音声言語を手の動きと形に置き換えたものである、文法を持たない、等の誤解である。また、一般に手話と呼ばれているものの一部は、実は手話とは言えないものである<sup>4)</sup>。本稿では、それはなぜ手話と言えないのかについて考察するとともに、それを手話と呼ぶべきではないことを強調したい。

## 2. 手話とは何か

手話について、米川は「耳の聞こえない人（聾者）間または聞こえない人と聞こえる人（健聴者）間に使用される、非音声の、手指の動きを中心とした身振りの一定の体系にもとづいた言語である。手話は音声言語同様に、自然言語のひとつである」とし、また、手話は聞こえない人たちの言語であり、単にコミュニケーションの手段ではない、と述べている<sup>5)</sup>。市田もまた、日本手話は自然言語のひとつであり、日本語とは語彙も文法も異なる独自の言語である<sup>6)</sup>、としている。すなわち、日本語や英語、フランス語、中国語などと同等に並列される、独自の文法体系や

語彙体系、音韻体系を有するひとつの言語であり、その主な使用者は耳の聞こえないろう者だと言える。

また、手話は多様であり、音声言語と同様、国や地域によって異なる。たとえば、韓国のろう者が話す韓国手話、アメリカのろう者が話すアメリカ手話、日本のろう者が話す日本手話はそれぞれ独自の異なる言語である。世界中には、114の手話の存在が確認されているという<sup>6)</sup>。さらに、日本手話の中でも、方言が認められる<sup>5)</sup>。

このように、手話は独立した言語であり、使用地域または社会によって異なっており、音声を使わないという特徴を持っているが、言語としての基本的特徴は音声言語と同じである。

## 3. 手話の分類

米川は、手話を次の三種類に分類し、以下の通り説明している<sup>5)</sup>。

- ① 音声言語から独立した言語形式としての手話
- ② 音声言語と①の混合された手話
- ③ 音声言語の統語構造を十分表した手話

このうち、①は生まれつき聞こえない人たちの間で伝統的に用いられる手話で、統語構造や語の意味などが音声言語と一致せず、言語体系をなすもので、

本来の手話である。一般に手話とはこれをさす。

②は聞こえない人と健聴者間や手話通訳にしばしば見られるもので、手話単語を音声言語の語順に並べて用いることが多く、口話が併用されていることも多い。

③は音声言語を手話単語や指文字を使って正確に表すために教育用に考案された、人工的手話で、これは音声を手指に置き換えて表したもの。教育現場で使用されることはあるが、実生活では使用されることはない。

米川の記述から分かることは、③の手話は通常使われることはなく、一般に使われる手話には①と②の二種類がある、ということである。したがって、ここでは①と②の手話をとりあげ、③については考慮しないこととする。①の手話は日本手話、②の手話は日本語対应手話と呼ばれている<sup>7)</sup>。

#### 4. 手話および日本手話の性質

音声言語においては、意味のない限られた数の音が、通常、順序正しく複数個連続することによって意味のある語が生成される。たとえば、「パン」という語では、/p/, /a/, /N/という3つの音がこの順序で発せられて初めて意味をなす。「パン」という意味を表すには、これらの音がこの順序で産生される必要があり、/p/が/k/になれば他の意味を表すことになり、順序が変わってしまうともはや意味を持たない音の羅列になってしまう。このように、/p/, /a/, /N/は、意味を表象する最小の言語単位であり、これらは音素と呼ばれる<sup>8)</sup>。ある音声言語で使用される音素の種類はわずかだが、多様な組み合わせパターンにより、理論上は無数の語を生成することが可能となる。日本語では、5種の母音音素、14種の子音音素、3種の特殊音素を使っている。「パン」は、母音音素、子音音素、特殊音素が各々1つずつ使用されている例である。

これと同じことが手話にもあてはまる。ただし、手話の場合、音素とはいわず動素と呼ばれている<sup>9)</sup>。アメリカ手話では、21種の手型動素、12種の位置動素、22種の運動動素が組み合わされて使われるという<sup>1)</sup>。

意味のない限られた数の音素が組み合わせられて理論上無数の語を生み出す、という性質は、あらゆる音声言語の普遍的性質であり<sup>10)</sup>、手話もこの性質を持っていることは、両者が同質であることを意味する。

ところで、語が複数連なると文を形成するが、語と語の関係や文としての意味を規定するのが文法である。たとえば、以下の例で意味を規定しているのは、日本語では助詞であり、英語では語順である。

- 1) 花子が良夫をたたいた。
- 2) 花子を良夫がたたいた。
- 3) 良夫を花子がたたいた。
- 4) Hanako hit Yoshio.
- 5) Yoshio hit Hanako.

上の例文1)と3)は、語順は異なるが意味は同じである。例文1)と2)は語順は同じだが意味は異なる。日本語では、動作の主体と対象を表すのに語順は関係なく、機能語である助詞が規定している。一方、英語においては、語順が動作の主体と対象を規定している。例文4)と5)を比較すれば明らかであろう。このように、文法をどのように表現するかは、言語によって異なる。

日本手話では、文法上重要な役割を果たすのが非手指動作であるという<sup>1) 11)</sup>。これは、手指ではなく、頭部の動き、顔の表情、視線の方向、上体の向きなどで表現される。そしてそこには、音声言語とかわらない複雑な文法構造がある。

以上の通り、語を生み出す構造、文を生成するシステムという、言語におけるきわめて重要で根本的な性質は、手話言語も音声言語も本質的には同等であり、両者に違いはみられない。

#### 5. 日本語対应手話について

米川<sup>5)</sup>や神田<sup>12)</sup>によれば、日本語対应手話は、日本語の文法にのっとり日本手話の単語を手指によって意味を表現する、日本語の表示方法である。

日本語の表現形式としては、音声で表現する方法と文字で書き表す正書法が一般的である。しかし、日本語を表す方法はそれだけではない。音声記号を使って表記することもできる。そして、手指の形や動きによって表すことも可能である。ただし、その場合日本語としては欠陥の多い表現法となる。なぜなら、日本語対应手話では、日本語の語順で、日本語の代わりに日本手話の語に置き換えているにすぎないからである。日本語文の語を英語の語に置き換えても英文にはならないのと同じように、日本語文の語を日本手話の語に置き換えても日本手話文にはならない。また、日本手話と日本語は異なる言語であるから文法体系が違い、当然、日本手話に日本語の文法を表す動作はない。そのため、日本語対应手

話では日本語の文法を十分に表現することができない。さらに、日本手話の文法で重要な非手指動作を日本語対応手話に導入しようとしても、意味がない。英語の文法を日本語に取り入れようとしても意味がないのと同様である。

このように考えると、日本語対応手話は、手指を使って何らかの意味を表現しようとする点において、日本手話と同じであるが、その実態は表現形式を変えた日本語でしかない。手指で意味を表せば手話になるわけではない。手話は音声言語と同様、固有の自然言語である。しかし、日本語対応手話はそうではなく、あくまで日本語の一表現形式であり、それゆえ日本語対応手話は手話とは呼べないものである。

## 6. まとめ

日本手話と日本語対応手話の性質について言及し、日本語対応手話は手話と言うより日本語の一表現形式であるため、手話とは言えないことを強調した。

## 文 献

- 1) 市田泰弘：誤解される言語・手話。現代思想編集部（編）：ろう文化。233-247, 青土社, 東京, 2000
- 2) 米川明彦：手話ということば。136-142, PHP 研究所, 東京, 2002
- 3) 神田和幸：手話とはどういう言語か。言語, 27; 4, 26-33, 大修館書店, 1998
- 4) 神田和幸：手話学の前提。神田和幸, 藤野信行（編）：基礎からの手話学。36, 福村出版, 東京, 1996
- 5) 米川明彦：これから手話を学ぶ人のために。言語, 27; 4, 20-25, 大修館書店, 1998
- 6) 市田泰弘：ろう者のバイリンガリズム。言語, 32; 8, 22-33, 大修館書店, 2003
- 7) 斉藤道雄：もうひとつの手話, 129, 晶文社, 東京, 1999
- 8) 猪塚恵美子, 猪塚元：日本語の音声入門。50, バベルプレス, 東京, 2003
- 9) 神田和幸：手話のしくみ。神田和幸, 藤野信行（編）：基礎からの手話学。51, 福村出版, 東京, 1996
- 10) ジョージ・ユール（著）, 今井邦彦, 中島平三（訳）：現代言語学20章。32-33, 大修館書店, 東京, 1987
- 11) 木村晴美, 市田泰弘：はじめての手話。26, 日本文芸社, 東京, 1998
- 12) 神田和幸：手話学の前提。神田和幸, 藤野信行（編）：基礎からの手話学。37, 福村出版, 東京, 1996